

令和5年4月
一橋大学

令和5年度一橋大学学校推薦型選抜第2次試験

出題の意図等 【小論文】

商学部

設問 (1) : 課題文の該当箇所に関する論旨を適切に把握できているか、また体系的に説明できているかを問う問題である。以下に解答例を示す。

解答例：まず、防衛産業について、これまで欧州の多くの銀行や投資家は、ESGの方針に反するものだとして、防衛関連企業への投資を避けてきた。しかし、ロシアによるウクライナへの侵攻後、安全保障環境と地政学的緊張が深刻化した結果、そうした投資方針を見直したり、軍備の社会的効用をめぐって議論したりする投資家が出てきている。次に、エネルギー問題について、これまでESGを重視する投資家は、二酸化炭素排出量の削減や代替エネルギーへの転換を進めるために、石油などの化石燃料を供給する企業への投資を控えてきた。しかし、ロシアによるウクライナへの侵攻後にエネルギー価格が高騰し、それにあわせてエネルギー関連企業の株価も大きく上昇した。その結果、これまでの投資方針を見直すような動きを見せる投資家が出てきている。最後に、ソブリンリスクについて、これまでは、ESGを重視する投資家がロシアの半国営企業の株式やロシア国債への投資を行ってきた。しかし、ロシアによるウクライナへの侵攻後、そうした投資はロシア政府への支援につながりかねないとして、ロシアという国全体を投資対象から外そうとする動きが出てきている。

設問 (2) : 傍線部に加えて、課題文全体の内容を理解したうえで、自身の意見を論理的に説明することができているかを問う問題である。課題文で指摘されている問題点を考慮すると、ESG投資を支持する／支持しない、どちらの立場もあり得る。ESG投資を支持するのであれば、上記の問題点を緩和するために、何らかの施策が必要になるだろう。ESG投資を支持しないのであれば、世界が抱える諸問題に対処するために、何らかの代替策が必要になるだろう。いずれの立場においても、説得力のある議論を展開することが期待されている。以下に解答例を示す。

解答例：課題文では、ESG投資に関して大きく3つの問題点が指摘されている。1つめは、ESG投資の定義が厳密ではないため、グリーンウォッシングと呼ばれる、環境への配慮などを装った見せかけの行動がとられる恐れがあることである。2つめは、ESGの構成要素であるE（環境）とS（社会）とG（ガバナンス）がトレードオフの関係にあるため、投資をする際にどれか1つを重視すれば、他の要素については目をつむらざるを得ない事態が起こり得ることである。3つめは、ある主体がESGを重視した行動をとっているとしても、その取り組みや成果を定量的に評価することが困難なことである。これらの問題点があったとしても、私はESG投資を支持する。なぜなら、現在、国際的な機関によってESGに関する情報開示の基準づくりが進められているからである。課題文が指摘するように、ESGに関する企業活動の良し悪しを数値化することは困難かもしれない。しかし、企業が気候変動や人権保護についてどのような基本方針を持っているか、どのような活動を実際に行っているか、

といった点に関する定性的な情報が共通のフレームワークに基づいて開示されれば、上記の問題点は緩和されると考えられる。たとえば、そうした情報開示が継続的に行われることによって、グリーンウォッシングはいずれ露見するであろう。したがって、ESG 投資という考え方を否定するべきではない。

なお、上記はいずれも解答例であり、その他のアプローチを排除するものではない。

経済学部

「勤労者皆保険」に関して、問題に掲載した社説には、被用者保険の適用対象拡大による保険料の企業負担増加に対して危惧している記述がある。この点を正しく理解しているかを問うのが設問1である。このように、社説では、保険料増大をそのまま受け入れることが前提となっているのに対し、ミクロ経済学的な観点からは、このような不利な状況になった時に、コストを減らすために、保険料の支払い逃れを行うインセンティブが企業に生じることやその可能性、方法等に気付けることも重要である。そのため設問2は、そのような可能性に気付けるかを問う問題になっている。労働時間を19.5時間など20時間より少なくすることで、短時間労働者に該当しないようにすることなどが理論的には可能である。

設問3では、その先のImplicationとして、企業がこのような行動をとった場合の、賃金格差がどのようになる可能性があるかまで発展的に考察できるかを確認する問題である。設問2のように労働時間を短くすることで保険料逃れをした場合、そのような労働時間で働く非正規労働者が増えることになるが、その労働時間の短さでは、なかなか正規労働者と同内容の仕事を任すことや、同じ程度の人的資本投資を行うインセンティブを企業側はもちにくくなり、そのような要因が、非正規・正規労働者の賃金総支給額の格差だけでなく、1時間当たりの賃金率の格差にも寄与しかねない。一方で、雇用される非正規労働者の母集団にも変化が生じると考えられる。つまり、被用者保険の適用対象が非正規にまで拡大することにより、企業は、保険料を支払ってでも雇いたいと思えるような非正規のみを雇うことになるため、これまでよりも一層有能な非正規にしぼって雇用をするようになる可能性がある。このような要因は、統計値としては、非正規・正規労働者の間の賃金率格差を縮小させるような方向に作用すると考えられる。

設問4では、もしも上記のような保険料逃れが困難な場合、企業にとって非正規雇用が、以前よりコストがかかるものになるため、非正規労働者の雇用に消極的になる可能性を指摘できるかを問うている。

設問5では、様々な経済主体間で利害が異なる可能性を理解した上で、政策を評価する力、また、懸念点の克服法を検討し、社説や解答で与えられた情報を踏襲した上で、矛盾のない議論を発展させる力を総合的に判断する。

法学部

本出題では、国家がその福利を配慮すべき人々の範囲の問題と民主政の関係について論じた論説を題材とし、法学・社会科学を学習するにあたっての前提となるべき、社会に関する基本的知識と文章理解力・論理的思考力・表現力とを評価することを狙いとした。

設問 (1) : 本問は、主として基本的知識と文章理解力を評価することを狙いとしたものである。国家の成否を判断するための先決問題として、国家が配慮すべき人々の範囲が問題となること、その範囲が国籍や地理的範囲と必ずしも一致しないことを踏まえ、それが社会保障について考える際にどのような意義を有するかを説明することを求めた。

設問 (2) : 本問は、上述の諸能力を総合的に評価することを狙いとしたものである。前半では、ブラウン対教育委員会事件に対する言及から人種差別問題における民主政的意思決定の限界と非民主的論議の意義を読み取り、それが国民の範囲の問題にどのように応用されるかを問うた。後半では、なぜ民主政的意思決定が必要とされるのかを含めた論説全体の趣旨に照らして、非民主的論議に意義を見出す著者の議論を批判的に評価することを求めた。

社会学部

自由と不自由は互いに相容れない正反対のものと捉えられがちですが、そうした見方には収まらない両者の複雑で多様な関係のありようを見逃すべきではありません。たとえば、自由な振る舞いは多くの場合、自由を縛る一定のルールや秩序のもとで初めて可能となり、また評価されます。サッカー選手が縦横無尽な動きで対戦相手を出し抜くためにはまずもってサッカーのルールが共有されている必要がありますし、祭りでの無礼講は祭りが社会秩序のうちに位置付けられ、その秩序を脅かさない限りで許容され、またときに期待されることとなります。ここでは自由を縛るという意味での不自由が、自由の前提条件となっているといえるでしょう。また、自由が不自由を生み出すことも少なくありません。たとえば、経済的な自由競争は能力主義の徹底や最適な価値秩序の創造をもたらすなどとされる反面で、競争からの脱落者を生みだし、そうした人々の活動を特定の方向に追いやる側面もあわせもっています。こうした負の側面が行き過ぎた場合には、競争の原理そのものの再考が促され、その自由なあり方に一定の制限が導入されることになるでしょう。反対に、不自由が自由を生み出すこともあります。しばしば私たちは自由に制約があるときにはじめて自由を強く意識します。たとえば、女／男の対からなる伝統的異性愛規範は、少なからぬ人々にとってたいへん抑圧的なものとなりえますが、一方でその規範への違和感こそがレズビアン、ゲイ、バイセクシュアル、トランスジェンダー、その他無数の性指向や性自認を生みだしてきました。規範からの「ずれ」が新たな自由の輪郭を形づくるという点で、不自由は自由の母体となっているのです。

本設問は、以上に例示したような自由と不自由の密接不可分な関係を多面的に捉える洞察力、それを分析する思考力、思考を整理し説得的に提示する発信力を評定することを意図しています。

ソーシャル・データサイエンス学部

設問 (1) : 「適材適所」という古くから大切にされてきた制度設計の在り方について、新しい技術として注目されている AI と人間との分業に焦点をあてて考えさせる問題である。歴史的には、新たなテクノロジーが数世紀にわたって人間の仕事を奪ってきた一方で、オートメーション化が企業の生産性を向上させ社会を豊かにしてきた。AI の適材適所、人間の適材適所を検討したうえで、両者の適切な分業の在り方を探り、社会をさらに豊かにする方策を考えることを求めた。

設問 (2) : 人間を超える力を持つことも予想されている AI の進展がもたらしうる不平等について、渋沢栄一の言葉を参考にしつつ考えることを求めた。現代においてデータを持つものと持たないもの、AI 技術を利用できるものとそうでないものとの間に不平等が発生するかという、科学技術がもたらす負の側面について自分の意見を述べる能力を問うた。